

# 井上靖『敦煌』論 — 登場人物の象徴性 —

楊 雯 瀟

青年時代の井上靖にとって、西域は冒険、未知、夢に満ちたところであった。小説の道にたどり着いた彼は、小説の人物を自分の憧れた地に登場させて、青年時代の夢をこれらの人物によって実現させ、小説の主題に迫っていった。

小説における西域の他民族の舞台が主に主人公趙行徳の経験によって呈されているため、本論では主人公の人物像を中心に、井上靖の敦煌のイメージに接近する。『敦煌』はある意味で、主人公の西域冒険物語だと言える。その中では、極めて男性的な世界が展開されている。作品の主人公と彼をめぐる人物、さらに創作時に参考した資料及びエッセイなどを結びながら、『敦煌』の登場人物について考察してみたい。

## 第一節 主人公趙行徳の人物像

主人公趙行徳は「儒者の家に生まれ、幼児から学問に親しみ」、三十二歳まで、「書物を身邊から離れた日はない」読書人である。進士試験を受けるために故郷湖南の田舎から開封（北宋の都）へ上ってきた。しかし、開封での大切な試験を待っている間に居眠りで受けられなくなった故に、自己放棄の形で落第した。落第した趙行徳が開封の街をさまよった際、偶然に西夏の女を危難から救い、女から西夏文字が書かれた布を入手した。行徳にとってこの未知の文字が彼の好奇心をかりたて、西へ旅たった。涼州へ行く途中で、西夏軍に拉致され、西夏の漢人部隊の一員になり、西夏とその周辺の民族の戦争に参加した。

井上靖が『敦煌』を創作したとき、小説の時代背景を構築するために様々な苦勞をしていた。彼は「小説『敦煌』ノート」というエッセイに、小説の主人公の造型についてこう述べている。

小説『敦煌』では、主人公が進士試験の落第者になっているが、当時進士試験の落第秀才に西夏が眼をつけて、彼等を政治顧問のような役にしていたことは事実の記録があり、それについては宮崎市定氏『科挙』も、荒木敏一氏の東洋史論叢の殿試に関する二つの論文もそれに触れている。(注1)

つまり、主人公趙行徳が科挙の落第者になって、西夏に入るという設定には歴史上の原型があるということである。西夏軍の漢人部隊の一員になった行徳は度重なる戦争に参加し、運よく生き残っていた。主人公の身分の転換は物語の進行の方便であり、井上靖は行徳を「不死人」のように造型したと多くの先行論で指摘されているが、しかし落第進士が西夏の李元昊に降伏したことは史料の中に実際に記載されていたのである。

宮崎市定の『科挙』は、この話に触れている。宮崎氏の『科挙』は1946年10月、秋田屋によって出版され、科挙の問題をあらゆる角度から論じ、凡そ科挙に関する限り、ほとんどすべてが網羅し尽くされている。本書は緒論「科挙の沿革」「清代に於ける科挙の制度」「近世支那社会に科挙」「科挙制度の崩壊」から構成されている。第三章には三つのことが述べられている。第一は社会階級との関係であり、第二は官僚生活と科挙の問題であり、第三は科挙と学問との関係である。

『科挙』の第三章の第二節では、科挙と官僚生活について論じている。科挙時代に入って、受験者にとって科挙は朝廷の官僚になる最大な関門であって、宋代以前の時代と比べると、科挙によって天子の地位が極度に高くなった。科挙によって朝廷では党争が発生し、官界の気風も変わった。さらに科挙受験者が天子との関係について論じ、落第者たちが辺境に流れて辺境民族の首領に重用された事実は以下のように挙げられている。

天子の眼から見ても科挙受験者は一介の求職者としか思へなかった。宋代の天子は太宗の太平興国二年以後、開喜宴に際して新進士一同に詩を賦して賜はる習であった。仁宗の賜詩に、寒儒逢景運、報国合如何、

と云ふ句があったが、素寒貧の汝等を取立てて進士としてやったからには、存分忠勤を励んで報国を計れといふのである。(中略)既に科挙が求職運動の第一歩なるが故に、落第者の失望は深刻なるものであった。(中略)景德四年の頃、貢挙に応ずる挙人の数は一万三千有餘人に達し、其中殿試に興り得る者は十分の一に過ぎぬから、落第者の数は一万人を越えることになる。故に貧困にも拘らず萬一を僥倖して挙業に従事したる者は、今更に職業の修正も覚束なく、気概ある者は国境附近に流れて乗ずべき機会を觀望した。仁宗の治世、西夏の李元昊は斯る不平の讀書人を誘って謀師とした。張元昊なる者があって、累りに科挙に落第し、縦横の才を自負して辺りに走り、西夏討伐中の司令范仲淹・韓琦に会見を求めて奇功を立てんことを望んだが、二帥が躊躇して未だ用ひざる中に、遂に西夏に投じ、李元昊の帷幄に參して宋を苦しめた。(注2)

小説本文と上記を対照してみると、小説の主人公が讀書人から軍人になったことは、確かに「科挙」に挙げられた人物の経歴と同様である。しかし、趙行徳は一般的な落第者と根本的に異なっている。小説『敦煌』の主人公の落第は学力の不足ではなく、自分の居眠りによる試験の放棄が原因であった。そして、西夏の漢人部隊に入って、自分の名前を服に書いたことを西夏のリーダー李元昊に発見されても、李元昊に直接に重用されなかった。このほか、いくつかの違いが窺える。

第一の違いは天子と受験者の関係である。宮崎市定の「科挙」では、「寒儒逢景運、報国合如何」という一句から分かるように、天子が進士及第者に恩を与えて、及第者が天子の国家事業のために力を尽くすべきだと広く考えられていた。「忠君」という考え方がそこにあるのではないかと思われる。一方、『敦煌』の主人公趙行徳は確かに最初、立身出世のため科挙合格を目指して幼い頃から努力していたが、彼には物事に対して自分の意見を權威なども恐れずに最後まで主張し続ける素質がある。行徳の夢で、天子が何亮の安辺策について彼に聞く以下の場面に、それが強く表れている。

「——時の為政者が何亮の意見を用いず、何亮の否定した姑息羈縻の策をとって、辺境問題を今日に長びかせていることは、甚だ愚かなことである。今日西辺に眼をやってみると、遺憾ながらすべて何亮の予言した通りになっている」

趙行徳は何亮の安辺策を支持しながら、いつか自分の声が興奮に震えているのを感じた。行徳は自分の周囲で、椅子が倒れ、机が叩かれ、怒声と罵声が沸き起こるのを知った。併し、行徳は言いかけたことは最後まで行ってしまわねばならなかった。そこで再び彼は口を開いた。

「現在西夏は四囲の戎夷を征服し、日々強大となり、まさに中国将来の大患となろうとしている。宋はために、八十万の大軍を常に準備しなければならず、それを賄う費用は巨額に上り、しかも軍馬の産地は敵の手中にあって、その補給さえ満足にできない状態である」(注3)

第二の違いは落第者の失望である。宮崎市定の『科挙』では、張元昊などの落第者は西辺に走り、あらゆる手段を用いて、宋であろうが西夏であろうが自分の立身出世を求めようとした。井上靖が小説の主人公をこのようなタイプの人物に設定したくなかったことは明らかである。戦乱から夥しい経巻を守ったのは張元昊のような人物ではあるまい。張元昊が為政者の重用を求め続けていたのとは違って、趙行徳の落第による失望は、新たな目的を生み出すきっかけになった。落第して、「絶望に打ちひしがれ」て、開封の町を歩いた趙行徳は西夏の女と文字と出会って、「自分が心の中に持っている大切なものが、他の何ものかとすっかり置き換えられてしまったような気持ち」になって、「つい先刻まで進士試験にこだわっていた自分がひどくつまらないものに思えて」、「ましてそのために絶望的になっていた自分が滑稽な気がした」。つまり、趙行徳の科挙への執着は、落第と西夏の女との出会いによって、西夏文字を知りたいという新たな目的へと生まれ変わった。これらの異なるところが主人公の人物像を造型した際、井上靖が歴史資料を参考した上で創作した部分で、主人公の特徴になったと理解できる。

以上のように、趙行徳の文化への関心と情熱が彼の素質の一つである。そ

の後、経典を埋める大業が行徳によって為されたのも自然であろう。このような素質が行徳と仏教文化との関わりにも存在したのである。

軍人になった趙行徳は甘州攻略では、回鶻の王女を助け、王女との間に愛情がうまれた。その後、王女の死によって主人公趙行徳が仏教に興味を持つようになった。これが作中において重要な節目だと言える。主人公が仏教に心を惹かれたという変化について、椎名麟三は以下のような見方をもっている。

結局後から逆に考えていけば、千仏洞で経典がたくさん発見されたという事実がまず歴史的にあるわけで、仏教と人間の関係という考えがまず井上であって、この趙行徳という人物は必ずそこに到達するのだという計算があった。しかし、井上がこの小説では仏教は全然捉えられていない。ただ経典に興味をもったとか、経巻に興味をもったとか、そういう学問的興味が趙行徳にあり、仏教としての魂みたいなものには到達していない。(注4)

椎名氏の見解では、主人公の仏教への興味が小説ではただ「学問的興味」とどまり、仏教の「魂」に到達していない。井上には経典と経巻を仏教の象徴とみなし、仏教に対する興味＝経典と経巻に対する興味という図式があるというのが椎名の見方だと思われる。学問に情熱をもっている主人公は「開封に居る頃」でも、「西夏の都興慶」の二年でも、仏教に関心を持っていなかった。彼は「剃髪し、紫の袈裟をつけた僧侶たちにも軽蔑」の念を持った。しかし、主人公は肅州に入り、次第に「心の絶対者」を求めていく。「心の絶対者」というのは、「心のよりどころとなるもの」だ。文脈では、回鶻の王女の死が原因の一つであり、そのほか、「辺土」にいる行徳が「人間の小ささ」、「人間の営みの無意味さ」に実感したのがもう一つの原因である。

辺土に居る限り、死は常に彼の周辺を取り巻いていた。実際に行徳は、毎日のように死んで行く人間を目にしていた。人は一夜病みただけで呆気なく死んで行った。場内を歩けば必ず一人や二人死にかかって居る人

間を見たし、一步城外へ出れば、人骨が沙の上にむき出しに曝されているのが見られた。(注5)

主人公が宗教に救いを求めるという転換について、多くの先行研究ではすこし唐突だと指摘されているが、井上は以上のような解釈を読者に与えている。これは井上の青年時代読んだ旅行記などに呈された西域イメージの一つであろう。主人公は一般的な仏教信仰者の姿ではなく、「儒教者」の一面を持っていることが彼の仏教經典の勉強からよく現れている。肅州の城内で、僧侶の講釈をきっかけに、彼が「法華經の一巻を借り出し、それを読み終わると、次から次へと結局七巻全部読み終え」、「金剛般若經」「金剛般若經」の注釈書「大智度論」などを読み耽っている。こうして、行徳は「儒教の哲学とは全く異なった仏教の教理」を猛勉強し、肅州で手に入る限りの論議関係の經典を読み漁っていた。以来、行徳は回鶻の王女を思い出すたびに、「安定した静謐感が自分の五体を満たすのを感じた」。王女の死を機に仏教に転じた主人公は仏教によって救済されている。

実は小説で主人公の仏教への関心を考える場合、井上自身の経験を考慮しなければならない。井上靖は毎日新聞社で宗教欄の經典解説に命じられたが、最初は宗教について何の関心も知識も持っていなかった。宗教欄を担当するには、井上は「一週間ひとつずつ、經典と解説書を読んで」、「般若心經から華嚴經、浄土三部經、碧巖錄、瑞巖錄といったもの、あるいはまた歎異抄、教行信証など、やたらに読んだ」(注6)。一年の宗教欄の担当のため井上靖は「精魂をすり減らした」と述べている。仏教經典をやたらに読んでいる井上靖の姿は趙行徳とかなり重なっていると伺える。小説では、仏教への関心はさらに仏教經典の翻訳に従事している行徳の姿に現れている。

瓜州太守曹延恵は仏に対する供養の意味で漢文の仏教經典を西夏文に翻訳したが、行徳に協力を求めていた。訳經の仕事には必要となる人々を招聘するために再び西夏の都興慶に赴いて、過去自分が従事した西夏文字と漢字との対照表に名前をつけていた。ここで、仏教經典の翻訳と対照表の作る仕事の内容は異なっているが、両者とも西夏文字と漢字と関わりのあることで

あることに注意すべきだと思われる。西夏文字を学んだ今の趙行徳の文字についての関心はここで仏教の翻訳に転じている。そのほか、回鶻王女の存在も訳経事業に大きな役割を果たしている。「漢訳經典の文字を西夏の文字に置き換えるという仕事は、今まで必ずしも情熱が感じられなかったわけではないが、そこに回鶻の王族の女が一枚加わって来るとなると、その仕事は行徳にとってはまるで違ったものになった」(注7)ということである。

その後一年、趙行徳は訳経に専心し、六人の漢人とともに、涅槃部、般若部、法華部、阿含部、論部、陀羅尼部などの仕事に没頭していた。瓜州が西夏によって焼かれた時、行徳の関心は訳した二十巻の經典の状況にあり、「そこにあるべき二十何巻かの巻物はなかった」と気づいた。ここから読み取れるのは「經典が燃える」という心配であろう。この際に行徳にとって、訳経の目的は完全に回鶻の王女のためだということになっている。しかし、沙州に經典を保存する考えは戦火から經典を守るべき、そして經典を読みたい沙州の三人の若僧のためになすべきことである。

鈴木正志は行徳の変化が回鶻王族の女の影響に帰結し、行徳は「自己への執着を捨て、他人のために自己を擲つ」(注8)ようになると指摘している。しかしながら、文脈からは、訳経という事業を通して行徳は改めて經典の大切さを実感したのではないかと考えられる。仏教に興味を持ち、仏教經典の勉強をすることで、仏教經典の翻訳、仏教經典の保存に至る——主人公のこの一連の変化は、井上靖の当時の敦煌の宗教状況の把握から離れては考えられない。井上が書物から得られた知識を総合し、主人公の性格と経歴を依代にして、当時の敦煌周辺の仏教文化を物語に還元したかったのではないかと推測できる。

## 第二節 主人公以外の登場人物像

小説『敦煌』は主人公とほかの人物との関わりから成り立っている。小説の中で、西夏の前軍に配された漢人隊長朱王礼、于闐の尉遲王族の後裔で貿易商人尉遲光などの虚構人物が作られたほか、西夏の首領李元昊、沙州節度

使を担当していた漢人曹賢順と曹延惠など、歴史に実在した人物が書き込まれている。作品では主人公の趙行徳は戦乱の俗世に生きていたこれらの人物と関わるほか、沙州の仏寺の僧侶たちとも出会っている。

### 一 李元昊と朱王礼の人物像

『敦煌』に李元昊が初めて登場するのは彼の西夏の部隊を点検した時である。隊列にいた趙行徳にとって、李元昊は小柄であっても、「人を圧する威を備えていた」。特に、趙行徳が魅了されたのは李元昊が部隊を点検している時の視線である。李元昊は整列している兵隊の前をゆっくり歩きながら、「一人一人の爪先から頭のでっぺんまで眺め渡すような視線をなげて」いて、そして、「微かな頬笑を兵隊に与え」た。その笑いが兵隊の「心を沁み」て、彼のために身命を捧げても惜しくないと思わせるのである。

趙行徳が李元昊の部下として戦っていることについて不思議だと思わなく、李元昊に対する印象も宋と敵対する人物ではなく、一人の人間として彼を理解し、嫌悪感は全くなかった。この点に行徳の文人らしい態度が潜んでいる。

西夏の統率者として李元昊は文字を重視し、趙行徳の服に書いた文字に気付いたというところから文化を重視する彼の一面が窺える。彼は西夏文字を持っていることを特別に大事にして、西夏の軍隊に配った指令書も全部西夏文字を使い、西夏の都興慶でも西夏文字を使うことが強要されていた。西夏の勢力が及んだところに西夏文字が氾濫していた。文字は西夏の統率者にとって発展しつつある自国を主張する一種のプライドである。このような雰囲気の中で、新興国家としての西夏は西夏文字を持つことに特別な感情を持っている。開封の市場にその西夏の女が自分の持つ西夏文字の布片を恩返しとして趙行徳に送ったのはその一つの証明であると言える。ただし、李元昊が文字に関心を持つことは確かであるが、それは文化そのものへの関心ではない。それは西夏の国力を誇示するために自国の文字があることを強調しているに過ぎない。ちなみに、李元昊が西夏の国力を誇示する人物として描かれていることは、下記の本文において、実は『群像』の初出では、下線部



の一文が存在していたことから確認できる。

この元昊が王位に就くに及んで、彼がその国粹的軍国主義を一層強く押し進めることは火をみるより明らかなことであった。そしてこの西夏の新情勢に恰も対立するような形で、吐蕃の統率者は宗河城より移り、青唐（西寧）に拠って西夏に備えた。（下線が筆者、初刊では削除）

漢人隊長朱王礼は西夏の前軍として長年に渡って戦い続けていながら、漢字に一種のこだわりを持っている。合戦に勝ったら漢字の碑を作ろうと行徳に言い、行徳から「漢字で書くか、西夏文字で書くか」と反問されると、強く「ばか！」と一語答えて、「碑は勿論、漢字で書くんだ。俺たちは西夏人じゃない」という理由を述べた。朱王礼が自分の漢人身分にこだわっているもう一つの証明は、彼が趙行徳に言った次の台詞である。

「俺は読み書きができれば、もっと出世している。幾ら武勲を樹てても読み書きができないばかりに豪くなれん。お前にはこれから特別に目をかけてやるから、必要な時は俺のところへ来て、本部から廻ってくる指令書を読み」(註9)

このような考えに、もともと彼の属していた宋朝が文官を重用する方針の影響が表れているとは言わざるを得ない。この方針のため、宋朝の「軍部の要所要所へも文官出身の官吏が配されていた」(註10)。そして朱王礼は西夏の俘虜になって、西夏の前軍に配置されていることがより彼の漢人身分を意識させたのではないか。このような場合、漢字は彼にとって一種のアイデンティティのような存在であるに違いない。漢字と違って、西夏文字に対して、朱王礼は全く興味がなかった。実際、瓜州太守曹延恵が自分の持っている經典を西夏文字に訳したいという願望を述べた時、朱王礼はこのことについて終始むっとりしていた。彼にとって西夏文字より于闐の玉と侍妾のほうが喜ばしいものであった。こうしてみれば、朱王礼は漢字へのこだわりがあっても、

彼の場合も、文化そのものへの関心ではない。彼は漢人としてのアイデンティティ、自分が漢人であることを強く主張するために漢字にこだわっていたに過ぎない。

すなわち、西夏の統率者李元昊にしても、もともと宋の兵隊であった朱王札にしても、文字は彼等にとって自己主張の手段である。しかし、この二人と違って、趙行徳は文化そのものに関心を持って、追求している。彼は李元昊の点検を受けたときに、不思議に思ったのは自分が李元昊の部下で、彼のために戦うことと、自分がこれにたいして厭とも思わないことである。そもそも趙行徳は文化という視点から西夏を意識していると思われる。それは、初めて西夏の都興慶に入った際に、彼が受けた驚きからも確認できる。

趙行徳が興慶の街へは行って真っ先に驚いたことは、街の建物にも築地にもやたらに文字が書きつけてあることであった。いずれも例の漢字をもとにして構成した西夏文字であった。それらの黄、青、朱、とりどりの色で書かれた奇妙な形の文字の氾濫は、それを見慣れるまでは、行徳は街を歩く度に異様な感じを受けた。(註11)

新しい街に来てこのような眼差しを持っているのは趙行徳の文人氣質と深く関わっている。興慶で西夏文字の勉強を通じて、文字を相手にする彼の本来の生活を取り戻すことができた。また、彼の学識の深さによって、「初めはいろいろな雑用を仰せつかりながら西夏語の訓練を受けたが、やがてその学識を認められて、特別の仕事が与えられるようになった」。その仕事も文字を相手にするのであって、前の代書と違って、今回は西夏文字の頒布用の小冊子を作ったり、漢字の意義を書き写したりするのである。こうして、行徳は彼が知りたい西夏文字そのものを身につけたことだけでなく、西夏文字を用いて広く活躍し始めていると見受けられる。しかし、この部分では、小説の肝心を要素である仏教は出てこない。趙行徳は回鶻の女の死と後の辺土の人々の死から仏教へ関心を持つようになった。しかし、彼の仏教經典への深い興味の抱き方は西夏文字を学ぶ姿とほぼ同様で、何かに心惹かれて夢中

になって、仏教經典を次から次へと読み続けているのである。仏教經典も書物であって、この仏教經典に対する趙行徳の情熱は書物とともに成長してきた彼の書物への情熱と同じ性質のものである。こうして、瓜州の太守曹延恵と沙州の若い僧侶たちの仏教經典への愛着を加えて、西夏の軍隊が沙州へ接近する時、趙行徳は于闐の商人尉遲光の食欲を利用して膨大なる經典を守るため、のちに書物を洞窟に埋めることとなった。

## 二 尉遲光の人物像

物語の展開を考察するために、于闐商人尉遲光の人物像に言及しなければならない。小説の中で、西域の一つ側面を代表するのは、于闐王族の後裔尉遲光であり、西域の諸国を往来する貿易商人である。彼が登場するのは小説の第五章で、物語の中盤にあたるころだと言える。行徳は太守曹延恵の訳経請求を受け、部隊とともに出発するのを待っていた。ここから、西域の地で単独で行動する難しさが現れている。しかし、瓜州太守曹延恵は沙州の貿易商人尉遲光が、西夏の都興慶へ出かけると紹介し、彼とともに興慶に行くのを勧めた。この時、行徳は初めて尉遲光という名前を耳にしたのである。戦争が続くという状態で、依然として隊商を組んで出掛けるのはこの時の行徳から見れば、「無謀」である。

尉遲光が行徳とともに興慶へ行く代価として、朱王礼のところから二十人の武器を、曹延恵のところから五十頭の駱駝を申し込んだ。彼は自分の身分に誇りを持っており、このような誇りも彼を西域の沙漠に行動させたのであろう。西域商人として、尉遲光は異なる言葉を身につけている。行徳と初めて面会する時、土地訛りの漢語を使っていた。出発準備に臨む尉遲光について、行徳の視点によってこのように描出されている。

尉遲光の口から発せられる言葉は、種々雑多だった。回鶻語や、吐蕃語や、西夏語の時は行徳にも解ったが、あとは何語であるか全然わからなかった。行徳は耳慣れぬ言葉が出てくる度に、それはどこの言葉であるかと尉遲光に訊ねた。尉遲光は初め于闐だとか、竜だとかアシャだと

か答えていたが<sup>(註12)</sup>(後略)

隊商の首領として、各国の言葉を身につけた上に、西域の土地を順調に往来できるのであろう。「百頭の駱駝は一列の長い隊列を作り、そのところどころに、武装した者が馬に跨って配されていた」という様子には、この商人が自分の隊商の安全に対して配慮している様子がうかがえる。「言葉達者」「高い管理能力」という特徴を尉遲光の商人像に付け加えたのが井上靖の西域文化に対する関心であり、彼の西域イメージの重要な要素であると思われる。

小説では、尉遲光が瓜州から興慶、興慶から瓜州、瓜州から沙州、瓜州から高昌方面へと移動し、そして西方から沙州に引き上げるのである。西域の土地を往来している尉遲光が戦争を恐れずに「尉遲家の守神であるという毘沙門天を象徴するバイの字を大きく染め抜いた旗を立てて」戦場を通過するのである。小戦闘など気にしていなかった尉遲光が城邑を通過するとき悩んでいる。なぜかと言えば、「西夏占領前は回鶻人の機関に支払う」だけで、現在は西夏だけでなく、依然として実権を持っている回鶻の機関にも通行税を支払わなければならないからである。こうなると通行税のせいで、貿易商の損失が大きくなる。両国に通行税を支払わなければならないことに「通商権」をめぐる各国の間に行われた戦争が裏付けている。史実では、甘州は西夏の領有に帰したのは1027年である。

しかし、実力の弱い隊商に対して、尉遲光の残酷な一面が現れている。沙漠の中で、恐喝団になり、相手の持っている商品を全て略奪した。権力のある側に対する態度は正反対である。彼の食欲ははっきり浮上し、すでに没落した「尉遲王族」の「誇り」の異化だと理解できる。

彼が代表する商人像はおそらく当時の西域の実像であろう。敦煌は各文明の合流点だけでなく、東西貿易の中継地として有名である。考古学の研究において、出土された様々な文書は当時の貿易状況を語っているのである。井上靖が西域を書く場合、種々雑多な歴史資料を参照したゆえ、当時敦煌のあたりの風俗、宗教状況、交通状況、貿易状況などについて彼なりの印象が現れている。特に、敦煌は東西貿易の中継地という性質があり、尉遲光の商人

イメージは不可欠であろう。

興慶から西方の瓜州に戻る時、「玉、バルシア錦、獣皮、西域各国の織物や香料、種子」などの代わりとして、この貿易商の取り扱っているものの大部分は絹で、そのほかに筆、紙、墨、硯、書画、骨董などもある。具体的な貿易の内容から、井上靖は当時の東西貿易の実像を浮かび上がらせたかったのではないかと考えられる。尉遲光は自分が于闐王族の後裔という身分に強い誇りを持っている。往時の尉遲王族が没落したが、尉遲光は自分の体に高貴な血が流れていると深く信じ、彼の誇りと自尊心は「奇妙な動き方をしていた」。

尉遲光の母親は沙州の名家汜氏の出のため、漢民族と尉遲族との混血児である。このような人物設定は、当時井上靖が参考した藤枝晃の論文が裏付けている。例えば、藤枝晃の論文では、敦煌文書に見られる于闐と沙州との関係を次のように述べている。

曹氏は代々于闐・甘州の両国と婚を通じ、協商を結び、諸国との緊密な連繋の下に交通の管理、貿易の中継を営んでいたのである。(註13)

また、論文の中で、千仏洞の中で、于闐王の寄進にかかる仏洞もあることも言及されている。尉遲光は虚構の人物であるが、しかし、人物像の造形をめぐって、そのいくつかの要素は歴史資料に基づいていたのである。

鳴沙山に仏洞を開鑿することは尉遲光にとって、自分の身分の主張であり、行徳の前で、傲慢な態度を見せている。しかし、彼の目には、他の隊員と駱夫より、行徳は彼と対等に話のできる身分をもっている。尉遲光の考えには、矛盾が見られるようであるが、その根底にあるものはやはり彼が持っている自尊心と誇りであろう。しかし彼の話題が突然「回鶻の女はみんな売女」に転じて、行徳はこのことだけは、譲ることができず、結果として尉遲光に殴られてしまった。行徳の首飾りを見ると、尉遲光の態度が急転し、その首飾りの玉の出所を究明したく、さらに多くの玉を引き出そうとしている。玉を取り扱っている彼は玉に対する目が鋭く、玉の価値を相当知っているからで

ある。

その後、尉遲光が何回も行徳にその首飾りを聞くのは、尉遲光の首飾りへの執着があるからであった。ここで、首飾りは一つ伏線として、後の経典を埋めるまで、作品を動かしている。尉遲光の王族の誇りと彼の貪欲が一對になって、作品の後半にいくつかの場面で表現されている。沙州が西夏に侵入されるとき、尉遲光が思ったのはどのように財宝を埋めるかであり、そのほか、曹氏一族の財宝を埋めることである。曹氏一族が高昌方面へ出発したことを知ったとき、尉遲光は不機嫌になり、「沙漠の略奪者になりかねない剣幕」であった。彼が曹氏一族の財宝だと思うものを千仏洞に埋めた後、千仏洞の隠し穴を知っている駝夫たちを王宮の中へ詰め込んで焼死させた。残酷な一面が窺え、彼の王族の誇りを想起してみると、この隊商における矛盾が浮上している。河上徹太郎は「解説」の中で、尉遲光が「典型的な西域の人物」であり、「諸民族の興亡に関する感傷に一切無関心で、戦場の危険の間を勇敢に立廻り、専ら隊商を組んで貿易に従事し、巨利を博している。勿論貿易といっても時にギャングであり、略奪者であって、彼にはそれだけの胆力と臂力が備わっている」(註14)と評している。

また、西域を往来する隊商として、尉遲は西域の各国の状況を熟知している。これらの知識によって、彼は自分の判断を下している。小説の中で、千仏洞に財宝を埋める理由について尉遲光は、

「あそこなら西夏の軍勢も手をつけまい。李元昊は仏教の信奉者だから。(中略) 若し回教徒の侵入によって千仏洞が荒らされたとしても、石窟の内部の隠し穴まで見付かることはあるまい。奴等は仏教に関するものには近寄ることさえ避けている」(註15)

と述べている。このイメージも井上靖が西域の状況を把握したからこそ構築されたものであろう。「往時東洋から西洋へ絹を運ぶ商人が、キャラバンを組んで通ったところである。駱駝と人との隊列、砂丘、草原、オアシス、砂あらし、幻覚、幻聴、そうしたものは昔も現在も変わらない筈である。時

間だけが、歴史だけが、それこそ隊商のように砂漠を横切って行ったのである」(注16)と井上靖は自分の西域イメージ、西域を往来した商人像について述べている。『敦煌』では、尉遲光の人物像は井上靖の西域イメージとして造形されたほか、もう一つ重要な意味は彼の存在が小説の主題の実現、すなわち肝心な経典を埋める場所——藏経洞を提供したことである。

そして、瓜州太守曹延惠と沙州の三人の若い僧侶について言及しなければならない。沙州節度使曹賢順と違って、自分の漢人身分に拘らず、西夏が吐蕃との戦闘に勝った後、曹賢順が部兵千騎を率いて西夏に降って来て、その後の西夏部隊の移駐をも認めていた。曹延惠が大事にしているのは経典である。小説では、延惠について

延惠は兄賢順の住まっている沙州は大きな都邑で、仏教も栄え、西域からの商人も多勢出入して城内は殷賑を極め、経済的にも富裕な者が多いが、それに引き換えここ瓜州は小さい都邑である。自分は兄の命でここに赴任しているが、ここには自慢して見せられるようなものは何一つない。ただ、私は仏教を信ずる点では人に劣らないので、経典だけは貴重なものを二、三の寺に多く集めさせている。(注17)

と形容されている。沙州節度使の後裔である曹氏兄弟は歴史上実在した人物で、西域における沙、瓜二州を支配していて、漢人の伝統を持ち続けている。延惠の話から読み取れるのは、彼が財宝名利より文化を大切にしていることである。西夏と摩擦があるにしても、やはり彼は自分の信仰のために経典を西夏文字に訳して西夏に送りたいかった。これが曹延惠の文化に対する関心の高さのわかるエピソードであり、趙行徳の共鳴しているエピソードでもある。曹延惠は趙行徳のように進士試験を受けるはずがなく、落第などの経験もないはずである。しかし、書物に対する愛着は趙行徳と同様で、彼が持っているこのような純粋な一面に趙行徳は惹かれて、延惠が依頼した釈経の事業に取りかかったのではないかと考えられる。趙行徳と曹延惠は共に、文人として特有の気質を持っていて、二人がお互いに理解し合っていたといえよう。

小説においてこの二人の他、沙州の寺の三人の若い僧侶たちにも注意を置かなければならない。避難せずに、自分たちが読みたい経巻を選び分けることに夢中になっていた。「自分たちの読んだ経巻の数はしれたものだ。読まないものがいっぱいある。まだ開けてさえ見ない経巻は無数にある。——俺たちは読みたいのだ」(注18)。この言葉は趙行徳から強い共感を引き出した。趙行徳はこの三人の若い僧侶の姿にますます切なさを感じ、経典を保護するために工夫をこらしていく。

これらの人物の書物と文化への執着は小説の主調低音になって、全篇の基調を定めたような存在であると思われる。なぜかという、小説『敦煌』は敦煌文書の発見という事実から構築された作品だからである。この敦煌文書の発見は20世紀の世界文化史上の大きな事件であって、合計4万点の敦煌文書の中で、「西暦三、四世紀頃の貝葉梵字仏典もあれば、古代トルコ語、西蔵語、トルコ語、西夏語等の仏典もあった。世界最古の写経もあれば、大蔵経未収の仏典もあった。禅定伝統史の貴重な資料も出てくれば、地誌として大きい価値を持ったものも現れた。摩尼教、景教の経義伝史書もあれば、梵語、西蔵語の典籍等、古語研究に曾てない新しい光を与えるものもあった。その他従来の東洋学、支那学を大きく変えるいろいろな史料が含まれていた」(注19)。しかし、この鳴沙山の石窟に夥しい量の経典、文書などが埋められた理由は不明であり、この理由への疑問は井上靖がこの小説を創作したい大きな動機になっていた。経典、文書は広義において文化である。動乱時代にこの夥しい量のものを守るのは必ず文化に強い関心を持っている人に違いないと井上靖はこう考えたのではないか。作品の主人公趙行徳、瓜州太守曹延惠と沙州の若い僧侶たちはこのような人々である。

### 三 登場人物の象徴性

人物像を構築した際、数多く歴史資料を参照したと同時に、井上靖は自分の西域イメージや経験を人物像に投影した。また、歴史小説の人物造形について、氏は自分の考えをこう述べている。



私は西域に取材した小説だけに限りませんが、広い意味で歴史小説を書こうとする場合、いつも人間の象徴劇のようなものを書きたい気持ちから出発しております。人間というものの個性を通して追求するのではなく、人間を象徴的に取り扱って、人間というものが根元的に持っているものに純粹に触れたいという気持であります。(中略) 歴史の流れの中において人間を見ようとする時、既にその人間は象徴的にしか取り扱えないようなものを持っているのではないかと思います。(注20)

つまり、歴史小説の人物は象徴的に取り扱われて、『敦煌』の場合も同じで、「歴史の史実の隙間を小説の空想で埋める」という特徴を最大限まで発揮して書かれた作品である。歴史資料の「実」と井上の想像の「虚」は交錯しながら、井上の心の中の敦煌イメージが描かれている。ある程度、『敦煌』も様々な象徴的な人物によって構築された世界だと言える。また、この象徴性を考える場合、もう一つ無視できないのは井上が参考した論文、東方文化研究所により発刊された『東方学報』に4回にわたって掲載された「沙州帰義軍節度使始末」の第四部分で、沙州とその東西に分布している諸国との関係の考察と余論の中で考察された沙州の基本的な特徴である。

(イ) オアシス国家であるから、当然その農業を立国の本とし(ロ) 而してここを通る貿易の中継によって富を致していた。そしてこの敦煌国の特徴というべきは(ハ) 諸外族の間に国を立てた漢人コロニーであり、(ニ) 佛教が隆盛を極めていたことである。

この四つの特徴は、小説の登場人物の身分と性格に活かされていると考えられる。(ロ)における「中継貿易が盛んな町の性格」は隊商を組んで、西域を往来している沙州の貿易商人尉遲光として表現されている。(ハ)における「漢人コロニー」という特徴は西夏の侵略へ最後まで抵抗した沙州節度使であり、沙州の漢民族の代表である曹賢順として表れている。そして、(ニ)における「仏教が隆盛を極めていたこと」は、趙行徳をはじめとする人たち

の努力によって仏教経典が保存されたこととして表現されている。

また、広げてみれば、藤枝晃の論文の中で、沙州について次のような論述もある。「沙州が西夏のために併合せられた時期は史籍に名証がなく、ただ宋史夏国伝上に景祐二年猫牛城攻略の記事につづけて、(中略)甘州も徳明以来の屢次の攻撃の後に天聖六年に至って西夏の獲る所となり、次いで同八年には瓜州の王なる者が西夏に降ったという。西夏の河西地方に対する圧迫はこの前後には激烈を極めていたことが察せられるのであって、沙州を西夏が占領したのも夏国伝にいう時よりさして隔たつてはいないと見なければならぬであろう。それより後に沙州から宋へ数回入貢しているのは、西夏の治下にあった沙州の商人などが西域諸国の商人などと同行して河湟地方より支那へはいつていたものと察せられる」(注21)。これが史書によって沙州が占領された時点についての推測であり、中では特に「景祐二年」と「天聖六年」と二つの時点が注目に値する。

【敦煌】に語られた物語の筋道を整理してみると、重要な時間と事件は歴史記載とほぼ一致していることが明瞭である。

表1 小説における重要な時間と事件

時 間	事 件
天聖四年(1026年)	趙行徳は開封へ上がった。
天聖五年(1027年)	趙行徳は靈州に近い聚落に入った。
天聖六年(1028年)	西夏の甘州攻略。
同年六月(1028年)	趙行徳は西夏の根拠地興慶に入った。
天聖九年(1031年)	西夏は吐蕃を迎え撃って、吐蕃の軍隊がほとんど潰え去った。
同年(1031年)	瓜州は西夏に降った。
明道元年(1032年)	西夏王李徳明は卒した。
同年3月(1032年)	朱王礼の部隊が命令によって瓜州に移駐。
同年5月(1032年)	趙行徳が西夏の都興慶へ赴く準備を整えた。
明道二年～景祐元年	
(1033～1034年)	趙行徳などが瓜州で経典の西夏文字への翻訳。

景祐二年（1035年）	西夏は朱王礼の部隊に出動命令が降って、本格的な吐蕃攻略を始めた。
同年12月13日	趙行徳は般若心経を写経して、大雲寺比丘等と聖経を莫高窟に移した。

こうしてみれば、沙州の町の性格にしても、沙州にとって重要な出来事にしても、物語の設定は藤枝晃から学んだ資料に基づいている。そのほか、小説における時代背景などの構築に従っていた「歴史其儘」と同様である。例を挙げてみると、小説の登場人物では、曹延恵、曹賢順は歴史に実在した人物である。彼らに関して、藤枝晃の論文の下篇では、曹氏時代の帰義軍状況を史書の記録と出土した敦煌文書を結びながら、「曹氏時代には節度副使格に相当する人物——節度使の弟若しくは長子——が瓜州を領有するのが普通であった模様である」と述べている。そして、「この制は曹氏最後の節度使賢順の下に、弟の賢恵が知瓜州となるまで引続き行われていた」と述べている。小説の中で、曹延恵と曹賢順、瓜州と沙州の関係は確かにこのようなものである。

于闐の貿易商人尉遲光の人物像は、やはり歴史資料に基づいていたのである。于闐は古くより玉の産地として広く知られている。玉はその時期に西方諸国より中国本土へ輸入品のうち、馬と並んで数量の最も多かったものである。唐代の安史の乱後、尉遲族の消息が絶っていたが、五代になると、李聖天と名乗る王が引き続き、中国本土の王朝に朝貢し、引続き宋初に及んでいた。この朝貢は常に沙州を経由したので、自然沙州の曹氏はこれと特別の関係を結んでいたのである。小説では、藏経洞を提供した尉遲光の人物像がおそらくここにあるのである。彼が沙州と瓜州の曹氏一族と熟知し、自分の高貴な血統があることに誇りを持っている。彼の家が鳴沙山に仏洞を開鑿した名家だと自己主張した。

人物のほか、小説で描かれた町も論文の内容と相当重なっている。涼州を例としてあげると、以下の表にまとめることができる。

表2 涼州に関する重なる部分

重なる部分	「沙州帰義軍節度使始末」	「敦煌」
<p>馬の産地 異民族、諸勢力の闘争の地</p>	<p>宋代になると、ここは西涼府と呼ばれる。河西の東端に位置する此處を領有する者は東西交通の關鍵を握ることができ、以て以西の諸国の死命を制することができる。のみならず、ここは当時支那に最も切実に要求せられていた馬を多く産することによって著はれて居る。従って周囲の諸勢力や土着勢力の間に涼州保持のための闘争が繰返されていた。(1942年6月『東方学報』、東方文化研究所、82頁)</p>	<p>「涼州の畜は天下の饒たり」と言われ、古来名馬の産地として知られていた。従って以前から度々、周囲の異民族や土着勢力の間にこの争奪戦が行われていた。(297頁) 涼州は地味肥沃で、農産物多く、城を一步出ると見事な耕地が開けていた。西夏は河西第一の穀倉を自己の所有としたわけであった。またこの付近で産する馬は天下第一の良種とされ、中国の環慶の馬がこれに次ぎ、秦、渭の馬は骨格は大きい<sup>が</sup>、軍馬としては機敏さの点で欠点があるとされていた。(304頁)</p>
<p>折逋姓を名のる部族 城郭国家 数百戸の漢人 城外耕作</p>	<p>この時期には吐蕃や其の他の遊牧民がこの邊一帶に水草を逐って居り、涼州には折逋姓を名のる六谷部の土豪が君臨して居り、そのほかに、数百戸の漢人が或は城廓に住み或は郊野に耕作していた。(同上、82頁)</p>	<p>涼州には吐蕃の別種と見なされている折逋姓を名のる一部族があつて小さい城郭国家を造っており、雑多な民族と共に、城の内外には五百戸の漢人が住んで農業に従事していた。 趙行徳は涼州へはいつてから、城内に於いては兵隊以外は一人の人間も見なかった。西夏に占領されるまで涼州に住んでいた住民たちは、役に立つ者は悉く西夏の部隊に編入され、役に立たぬ老人や女子供は全部城外に移されて、農耕に従事させられたり、水草地帯で放牧の仕事させられたりした。(304頁)</p>

以上の表から見られるように、藤枝晃の論文における涼州に関する肝心な部分が全部小説に採り入れられている。そして、これらの情報の上に、井上靖がさらなる描写（馬、涼州の漢人）を追加し、物語の有機的な一部とさせたのである。

井上靖はこれらの歴史資料を読みながら小説を書くのである。要するに、物語の創作自体に書物を大事にする井上靖の姿勢が窺え、井上靖が書物、文化を大事にするのは物語の主人公趙行徳と同じであると思われる。小説の終

章に西夏が存在した時空を超えて、戦乱から守られてきた経巻は西夏の歴史に消えた運命と違い、再び世に浮上して、またそれをめぐって成立した世界的な文化研究に重点を置いた。こうして、小説の文化を大事にする主題もさらに深化していくと思われる。

## 注

- (1) 井上靖「小説『敦煌』ノート」『井上靖全集 別巻』、新潮社、2000年4月、210頁。
- (2) 宮崎市定『科挙』、秋田屋、1946年10月、246～247頁。
- (3) 井上靖「敦煌」『井上靖全集 第十二巻』、新潮社、1996年4月、289頁。
- (4) 『群像創作合評』、講談社、1959年6月、374頁。
- (5) 井上靖『井上靖全集 第十二巻』、新潮社、1996年4月、336頁。
- (6) 井上靖「私の自己形成史」『井上靖全集 第二十三巻』、新潮社、1997年6月、40頁。
- (7) 井上靖「敦煌」『井上靖全集 第十二巻』、新潮社、1996年4月、356頁。
- (8) 鈴木正志「井上靖『敦煌』の世界—趙行徳と回鶻の女とを中心に—」(『新大國語』、1988年3月、54頁)
- (9) 井上靖「敦煌」『井上靖全集 第十二巻』、新潮社、1996年4月、307頁。
- (10) 同上、287頁。
- (11) 井上靖「敦煌」『井上靖全集 第十二巻』、新潮社、1996年4月、323頁。
- (12) 井上靖「敦煌」『井上靖全集 第十二巻』、新潮社、1996年4月、349頁。
- (13) 藤枝晃「沙州歸義軍節度使始末」(四・完)(『東方学報』、東方文化研究所)、1942年6月、75頁。
- (14) 河上徹太郎「解説」(新潮文庫『敦煌』、新潮社)、1977年8月、236頁。
- (15) 井上靖「井上靖全集 第十二巻」、新潮社、1996年4月、384頁。
- (16) 井上靖「シルクロードへの夢」『井上靖全集 第二十七巻』(新潮社、1997年10月)、443頁。
- (17) 井上靖「敦煌」『井上靖全集 第十二巻』、新潮社、1996年4月、343頁。
- (18) 井上靖「井上靖全集 第十二巻」、新潮社、1996年4月、386頁。

(19) 同上、418頁。

(20) 福田広年『増補井上靖覚書』、集英社、1991年10月。

(21) 藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」(四・完)『東方学報』、東方文化研究所、昭和十七年六月、54～55頁。

#### 〔付記〕

本論は、2018年に北京外国語大学大学院北京日本学研究中心に提出した修士論文「井上靖『敦煌』論—人物像を中心に—」の一部をまとめたものである。